

第2節 発掘調査に至る経緯

1 荒海貝塚とその周辺遺跡の研究

(1) 早稲田大学による荒海貝塚の調査・研究

発掘調査の経過 千葉県成田市に所在する荒海貝塚は、旧利根川がかつて内海であった時の名残をとどめる長沼に面した台地上の貝塚である。坪井正五郎の踏査などによって、明治時代から縄文時代の貝塚として知られていた。

学術研究のための荒海貝塚の発掘調査は、1960年（昭和35）、早稲田大学の西村正衛によって初めておこなわれた（図24）。その目的は、「利根川下流域の考古学的調査の一環」であった〔西村1961：1〕。ことに縄文時代の貝塚文化が利根川下流域においてどのように終焉を迎えるのか、という問題を究明するのに、荒海貝塚は格好の遺跡として認識されたのである。これが第1次発掘調査であり、翌年第2次発掘調査が、1964年に第3次発掘調査がおこなわれた。

第1・2次発掘調査の概報は西村正衛、早稲田大学考古学研究会によって1961年と1962年に『古代』および『金鈴』に掲載された〔西村1961、早稲田大学考古学研究会1962〕。1965年には調査にあたった早稲田大学考古学研究室のメンバーにより、「関東における縄文式最後の貝塚」と題する報告が雑誌に掲載された〔西村ほか1965〕。短報ではあったが、一般誌への掲載ということも手伝い、要を得た紹介によって荒海貝塚は縄文時代終末の遺跡として、その重要性、学術的な価値が強く印象付けられることになった。

荒海貝塚発掘調査の詳細は、西村正衛によって『早稲田大学教育学部学術研究』に掲載され〔西村1974・1975・1976〕、第3次発掘調査は西村の利根川流域における貝塚文化研究の集大成である『石器時代における利根川下流の研究―貝塚を中心として―』に第1・2次発掘調査の改訂稿とともに掲載されている〔西村1984〕。

発掘調査の概要 第1次発掘調査は1960年6月28日～7月3日におこなわれた。発掘はA地点とB地点であり、A地点はL字形の崖下の斜面にA・B・Cトレンチを設定しておこなわれた。Aトレンチの層序は、上から表土－混貝土層－混土貝層－黒色土層－黒褐色土層であり、Bトレンチは混土貝層と混貝土層の間に純貝層が厚さ1mほど堆積していた。混貝土層は攪乱が多いが、混土貝層は整然としており、貝層からはイノシシ、シカの獣骨がおびただしく、土器片やその他の加工品も出土した。黒色土には後期の土器が多く含まれていた〔西村1961：4〕。

第2次発掘調査は、1961年（昭和36）11月19～26日におこなわれた。A地点にD～Kの8本のトレンチを設定して発掘された。D・E・I・J・Kトレンチが第1次発掘調査と同じL字形崖線から下がった斜面であり、Fトレンチが南側崖線の上、G・Hトレンチが東側崖線の上に設定された。

Bトレンチに並列したDトレンチと、南の延長上にあるEトレンチの混土貝層は、Bトレンチと同じく千網式、杉田Ⅲ式、荒海式を主体として包含していた。Eトレンチに並列するIトレンチの混土貝層は、晩期終末の土器を包含するが量は少なく、貝層の末端的状況を示している。E・Iトレンチ混土貝層は、第2次発掘調査のトレンチの中でも荒海式の変形工字文土器が目立った〔西村1975：17〕。J・KトレンチはAトレンチの東、崖面との間に設けられ、J区の混貝土層とK区の

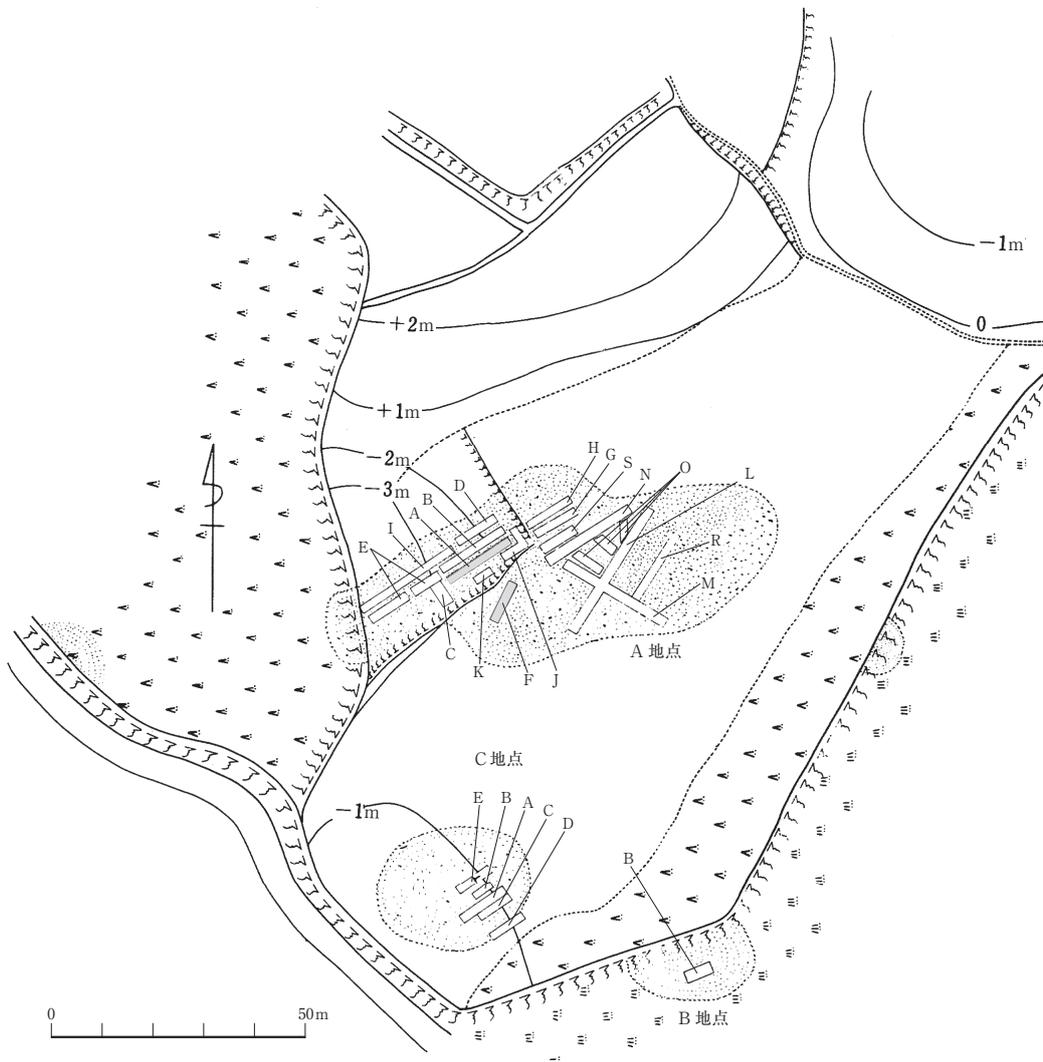
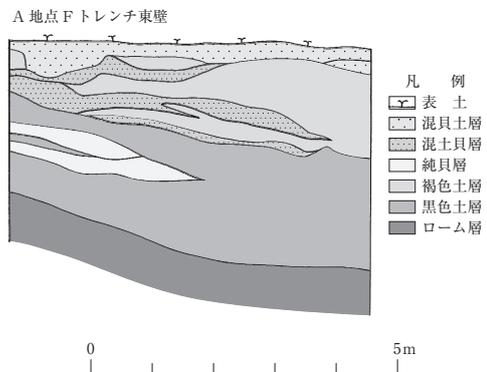


図24 早稲田大学による荒海貝塚発掘調査トレンチ（西村1984：575頁第1図・576頁第3図を改変）

混土貝層からは、千網式・杉田Ⅲ式土器と折り返し口縁の撚糸文の粗製土器が主体的に出土した〔西村1974：1-2・6-7〕。

G・Hトレンチは、A・Bトレンチを延長した崖の上の位置に設定されたが、Gトレンチは混土貝層の下に大型のヤマトシジミで構成された厚さ1mに及ぶ純貝層があって晩期後半の土器が出土し、その下の第2混土貝層からは安行2式土器が、その下の褐色土層から加曾利B式土器が出土した。Hトレンチの混土貝層も大型のヤマトシジミの集積からなる晩期後半～終末の層である〔前掲：6〕。ただし、荒海式土器のうちの変形工字文の土器はG・Hトレンチから検出されたという積極的な証拠はあがない〔西村1975：17〕。

Fトレンチは表土の下に暗褐色土層と黒色土層があるが、それらに貝層が5枚介在している。下



から順に、第5貝層=称名寺式土器をまじえた堀之内1式土器を包含するハマグリ主体の層、第4貝層=加曾利B式をまじえた堀之内1式土器を中心とするサルボウ主体の層、第3貝層=加曾利B式と安行1式土器を包含するヤマトシジミのほかサルボウ・ハマグリ・アサリ・カガミガイが目立つ層、第2貝層=安行2式土器を包含するヤマトシジミを主体にハマグリ・サルボウ・オオノガイからなる層、第1貝層=安行2・3a式土器を包含するヤマトシジミを主体とする層であった。縄文後期～晩期にわたる、荒海貝塚の周辺環境の変遷と採貝活動が年代的に追跡できた、貴重な例となった〔前掲：3〕。

第3次発掘調査は、1964年（昭和39）11月17～25日におこなわれた。このときのC地点の発掘調査によって、前浦式土器と大洞C2式土器が多く共伴して出土し、その編年的位置づけの議論に終止符を打った。また、埋葬人骨も出土した。

出土遺物 以下、第1次発掘調査の結果を、出土遺物を中心にまとめておく。A地点の貝層から出土した遺物は自然遺物と人工遺物である。自然遺物のうち貝類はヤマトシジミが90%しめ、オオノガイ、アカニシ、ハマグリがそれに続く。アワビも検出され、交易活動によって入手されたことが推定された。魚類はクロダイ、スズキ、コイであり、クロダイが多い。哺乳類はイノシシ、ニホンジカが最も多く、この地域最大の出土量を示すことが確認された。

人工遺物は、石器、石製品、骨角牙製品、貝製品、土製品、土器である。石器は石斧4・石鏃2・石槍1・敲石12・石剣1・砥石1、石製品は硬玉製小玉1、骨角牙製品は骨製尖頭器14・鹿角製尖頭器1・骨針7・牙製尖頭器1・牙斧1・管状鹿角製品5・鹿角棒2・切断のための切り込みをつけた鹿角、貝製品はベンケイガイ製を主とする貝輪未成品と破損品59、土製品は土偶2・有孔円盤形土製品2である。

石器のうち、第2次発掘調査で出土した西洋梨形の磨製石斧は千網式～荒海式の貝層のもので、有角石器との関連から弥生文化に接近した磨製石斧と考えられた〔西村ほか1965：31-32〕。荒海貝塚からは複雑な形態で、まれに精巧な文様が彫刻された骨角器が多く検出されている。彫刻に用いた刃器としての石器がほとんどないことから、金属器の存在を推測しており、鋭利な削痕がついた鹿角の角座に対して金属器の存在を想定すべきであろうか、としているが、その一方で利根川流域の縄文文化には刃器の石器が貧弱なのは一般的な傾向であることから、金属器の存在について強調することを控えてもいる〔西村ほか1965：33-34〕。

土器は縄文前期の繊維土器、後期の堀之内1式、加曾利B式、安行1・2式、晩期の安行3a・3b式、大洞C2式併行型式（前浦式）、大洞AおよびA'式比定の土器などであり、「大多数は、千網式および大洞A'式相似の精製、半粗製、粗製土器であるが、なかでも、粗製土器が最大の量を占めている」。粗製土器は「条痕文、刷毛目文」をつけたもので、混貝土層から主として出土した。貝層下の黒色土層には後期の土器片とともに大洞C2式併行型式の土器がかなりの量出土した〔西村1961：9〕。Aトレンチの混土貝層から、貝殻条痕文を施した土器底部に粉痕と思われる圧痕の認められるものがある。

(2) 荒海貝塚周辺遺跡の調査・研究

奈和同人会による発掘調査と研究 下総地方をフィールドとする奈和同人会により、1980年代前半に荒海貝塚周辺の縄文晩期終末の遺跡がいくつか発掘調査され、とくに長沼に面した低段丘上の貝塚の様相が明らかになった。その遺跡は、千葉県成田市龍正院貝塚〔柿沼・青木1983〕と成田市宝田鳥羽貝塚〔奈和同人会1987〕である。さらに、水系を異にするが10kmほど西南に位置する成田市殿台遺跡の浮線網状文土器の良好な一群の調査成果も公表された〔藤下・喜多・寺内1984〕。

龍正院貝塚は、大原野貝塚ともいう。利根川のすぐ南にあり、長沼の入口部に位置する。標高は5m前後で、低段丘上に立地する。発掘調査は1982年におこなわれた。荒海貝塚は約4km離れた南西に位置する。層序は地山の砂層を含めて6層からなり、貝層は上から混土貝層の第Ⅲ層、純貝層の第Ⅳ層、混土貝層の第Ⅴ層であり、第Ⅱ層は混貝土層である。ヤマトシジミが大半だと思われる。

出土土器は縄文晩期終末～弥生前期である。第Ⅳ層からは鈴木正博による荒海J型三分岐浮線文〔鈴木1985〕の鉢や口縁に6条の平行沈線文をもつ深鉢が出土した。深鉢の地文の撚糸文と細密条痕文の比率は、6:1である。第Ⅲ層からは水I式中段階の浅鉢と沈線文を施した鉢や深鉢、大洞A₂式の文様モチーフの沈線文をもつ広口壺が出土した。第Ⅲ層の撚糸文と細密条痕文の比率は、4:1である。第Ⅱ層には沈線間に列点文をもつ撚糸文を施した深鉢が伴う。撚糸文と細密条痕文の比率は、1:2と逆転する。第Ⅰ層には1本単位の菱形文の深鉢が伴う。撚糸文と細密条痕文の比率は1:1である。

宝田鳥羽貝塚は、長沼に突き出した低丘陵末端の貝塚で、約2km北東に離れた荒海貝塚の対岸に位置する。標高は4～6.5mで、低段丘上に立地する。発掘調査は1986年におこなわれた。層序は地山の砂層を含めて7層からなり、貝層は純貝層のⅣ層とその下の混土貝層のⅤ層である。貝層の大半はヤマトシジミからなる。生育状況は龍正院貝塚第Ⅲ層と近似している。魚骨はコイ科のコイであり、獣骨はイノシシとニホンジカで、シノシシよりもシカの方が多い。これも、龍正院貝塚と共通する。

出土土器は縄文晩期中葉～弥生前期である。地山の上に乗る第Ⅵ層からは、姥山Ⅲ式と前浦式土器が出土した。第Ⅴ層の深鉢はすべて撚糸文であるのに対して、第Ⅳ層の深鉢はほぼすべて細密条痕であった。第Ⅴ層の深鉢には口縁と胴部に3本単位の平行沈線文を施した個体があり、第Ⅳ層の深鉢には頸部無文部に3本単位の沈線をV字状に施し区画内に列点を加えた個体がある。第Ⅲ層に相当する層からは、変形工字文の鉢が出土した。

青木幸一は、龍正院貝塚第Ⅰ・Ⅱ層は宝田鳥羽貝塚第Ⅳ層に併行し、荒海貝塚の2類あるいは姥山Ⅵ式である大洞A'式の古い段階に、龍正院貝塚第Ⅲ層は宝田鳥羽貝塚第Ⅴ層に併行し、荒海貝塚の1類あるいは姥山Ⅴ式の一部である大洞A式段階に相当させている〔奈和同人会1987:34〕。龍正院貝塚第Ⅳ層は撚糸文の比率から宝田鳥羽貝塚第Ⅴ層と併行するであろう。荒海J型三分岐浮線文を伴うことから、鈴木正博の荒海1式〔鈴木1985:92〕に併行する。龍正院貝塚第Ⅱ層は沈線間に列点文をもつ深鉢の存在から宝田鳥羽貝塚第Ⅳ層に併行するとみてよい。沈線間の列点文は、渡辺修一の研究によると、荒海2式古段階に特徴的である〔渡辺2007:17・18〕。そして、龍正院貝塚第Ⅲ層出土土器は水I式中段階の存在から鈴木正博の荒海1式であり、撚糸文と細密条痕文の比率からは宝田鳥羽第Ⅳ層よりも第Ⅴ層に近いといえ、青木の設定した併行関係は正しい。龍正院貝塚第

I層は荒海4式を含み、宝田鳥羽貝塚第Ⅲ層は荒海3式ないし4式の貝塚であり、弥生前期まで継続していることがわかる。

調査研究の成果 早稲田大学の荒海貝塚の発掘調査から、長沼周辺遺跡の調査を通じて明らかにされてきたことは、以下のとおりである。①荒海貝塚がある程度の面積を確保できる台地上に立地し、断続期間をもちながらも縄文早期から生活を営み、中央に空間をもつ環状の貝塚を形成し、土器の量が多く、土偶や鹿角製装飾棒などの祭祀的遺物を多数保有する中核的な遺跡であること、②標高の低い低段丘上の遺跡も荒海貝塚と同様、ヤマトシジミを主体とする貝塚であることと、姥山Ⅲ式・前浦式あるいは荒海1式から遺跡の形成が始まり、弥生前期までほぼ連続して営まれた貝塚であること、などである。さらに、鈴木の荒海1式土器が龍正院貝塚第Ⅳ層→第Ⅲ層と細別されたことと、荒海1式新段階の撚糸文と細密条痕文の比率の一つのあり方が示された点に意義がある。

その一方、課題も残った。第3章第1節で触れるように、1980年代は東北地方や西関東地方の貝塚で、細かな発掘調査がおこなわれ、それに基づく分析が進行した。それは、コラムサンプリングや水洗選別法の導入によって、層ごとに貝類の殻長組成や魚種などの変化をつぶさに観察し、生業活動の季節性や通時的変化を復元する定量的・動態的研究であり、下総地方でもそうした方法による貝塚の発掘調査によって、縄文晩期から弥生時代にかけての生業活動を分析する必要に迫られていた。

国立歴史民俗博物館による荒海貝塚の発掘調査以降、②のテーマである低段丘上の貝塚の調査が進行した。一つは千葉県史料財団による荒海川表貝塚の発掘調査と研究であり、もうひとつは地域はやや離れるが、明治大学による台方花輪貝塚の発掘調査と研究である。荒海貝塚との関係性や、長沼とその周辺地域の縄文晩期終末の遺跡動態、あるいは弥生文化とのかかわりについて、議論の素材が整ってきたわけだが、本節の意図は、国立歴史民俗博物館の荒海貝塚発掘調査に至るまでの研究を概観することにあるので、それ以降の調査がもつ意義などについては、割愛した。

(設楽)

2 発掘調査の立案と組織

(1) 発掘調査の立案

荒海貝塚の発掘調査は、国立歴史民俗博物館の特定研究「日本歴史における地域性の総合的研究」の「古代東国の地域的特性」の一環としておこなった。実施にあたっては、広い視野にたち学際的な共同研究とするために館内外の研究者の参加を呼びかけた。発掘調査にあたっては、青山学院大学、川村学園女子大学、熊本大学、國學院大学、島根大学、上智大学、千葉大学、筑波大学、帝京大学、東京大学、同志社大学、東北大学、奈良大学、広島大学、明治大学、立命館大学、早稲田大学など全国各地の大学生の参加を得た。発掘調査中は第1次は木下旅館に宿泊、第2次は桐之屋旅館に宿泊してバスに乗って現地に通った。

(2) 研究組織と活動

① 1989年度

研究組織

春成秀爾（国立歴史民俗博物館考古研究部助教授・研究代表者） 人工遺物の分析および総括

西本豊弘（国立歴史民俗博物館考古研究部助教授） 動物遺存体にもとづく生業の復元

永嶋正春（国立歴史民俗博物館情報資料研究部助教授） 漆・顔料の研究

設楽博己（国立歴史民俗博物館助手） 土器型式圏の研究

藤尾慎一郎（国立歴史民俗博物館助手） 西日本との比較

西谷 大（国立歴史民俗博物館助手） 中国新石器時代との比較

石川日出志（明治大学文学部講師） 墓制の比較研究

大塚達朗（東京大学文学部助手） 関東地方各地との比較

岡村道雄（文化庁文化財保護部調査官） 生産活動の復元と比較

小林達雄（國學院大学文学部教授） 新大陸との比較

小宮 孟（千葉県立中央博物館学芸員） 魚骨の分析にもとづく漁撈活動の復元

佐原 真（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長） ヨーロッパ各地との比較

林 謙作（北海道大学文学部助教授） 東アジア各地との比較

松島義章（神奈川県立博物館主任研究員） 自然環境の復元

研究活動

1989年9月21日 成田市荒海貝塚の予備調査 共同研究参加者

1989年9月22日 共同研究会（於・国立歴史民俗博物館）

「東日本の縄文晩期について」林 謙作

「文化の伝播か、人の移住か—西日本の縄文晩期・弥生早期—」春成秀爾

1989年10月20日～12月10日 成田市荒海貝塚の第1次発掘調査

荒海貝塚 A 地点貝塚のはほぼ中央、早稲田大学の発掘区に一部重なる形で12×8mの発掘区を設けて調査した。

1989年11月24・25日 根木名川一帯の沖積層の調査

1990年2月20日 国立歴史民俗博物館特定研究合同報告会

「成田市荒海貝塚の発掘調査—東日本における稲作の始まり—」春成秀爾

1990年3月2日 共同研究会 埼玉県桶川市後谷遺跡出土遺物の見学（桶川市）

1990年3月3日 共同研究会（於・国立歴史民俗博物館）

「荒海式土器研究の現状」設楽博己

「西日本における縄文から弥生へ」家根祥多

発掘調査参加者

石川日出志、大森隆志、岡田康博、大塚達朗、沖松信隆、甲元眞之、中沢道彦、仲田茂司、

林 謙作、日暮晃一、マーク・ハドソン、町田勝則、家根祥多

学生：林 克彦（青山学院大学）、岩崎京子・内田知枝子・大塚貴子・沢辺仁子・鈴木里香・山口典子

（以上、川村学園女子大学）、岸崎浩実・高橋真実・徳永園子（以上、國學院大学）、井上 賢・小笠原永隆・

加藤勝仁・橋本 淳（以上、千葉大学）、宇田川浩一（帝京大学）、近藤 修・田多井用章（以上、東京大学）、松村真紀子（熊本大学）、工藤 晃・田村陽子・藤城 泰（以上、奈良大学）、阿部伸一郎・生田浩之・渡辺裕之（以上、明治大学）、櫛部正典・鈴木康二・福田仁史・牧野 博（以上、立命館大学）、尾見真紀子・小鮎智紀・樋泉岳二・中山 豊・眞上 潤・松井 功・松田光太郎・吉田由紀（以上、早稲田大学）

作業員：糸川ふで、野口ヤス、桧垣保子、岩館まさ、神山まさ

協力者

新成田総合社、木下旅館、成田市教育委員会、株式会社パレオ・ラボ、古環境研究所

② 1990 年度

研究組織

春成秀爾（国立歴史民俗博物館考古研究部教授・研究代表者） 人工遺物の分析および総括

西本豊弘（国立歴史民俗博物館考古研究部助教授） 動物遺存体にもとづく生業の復元

永嶋正春（国立歴史民俗博物館情報資料研究部助教授） 漆・顔料の研究

設楽博己（国立歴史民俗博物館助手） 土器型式圏の研究

藤尾慎一郎（国立歴史民俗博物館助手） 西日本との比較

西谷 大（国立歴史民俗博物館助手） 中国新石器時代との比較

石川日出志（明治大学文学部講師） 墓制の比較研究

大塚達朗（東京大学文学部助手） 関東地方各地との比較

岡村道雄（文化庁文化財保護部調査官） 生産活動の復元と比較

小林達雄（國學院大学文学部教授） 新大陸との比較

小宮 孟（千葉県立中央博物館学芸員） 魚骨の分析にもとづく漁撈活動の復元

佐原 真（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長） ヨーロッパ各地との比較

林 謙作（北海道大学文学部助教授） 東アジア各地との比較

松島義章（神奈川県立博物館主任研究員） 自然環境の復元

泉 拓良（奈良大学文学部助教授） 西日本各地との比較

甲元真之（熊本大学法文学部助教授） 諸外国との比較

家根祥多（立命館大学文学部助教授） 近畿地方との比較

辻誠一郎（大阪市立大学理学部助手） 植物遺存体にもとづく生業の復元

研究活動

1990年6月23日 共同研究会（於・国立歴史民俗博物館）

「縄文後・晩期における西・東」大塚達朗

1990年6月24日 共同研究会（於・国立歴史民俗博物館）

「荒海貝塚第1次調査の結果報告」設楽博己、西谷 大、西本豊弘、春成秀爾

「大洞 B1 式をめぐる諸問題」林 謙作

1990年7月9日～9月7日 成田市荒海貝塚の第2次発掘調査

荒海貝塚 A 地点貝塚の第1次調査区の下層を調査した。また、東西トレンチ（18×2m）をい

れて、晩期の貝層・包含層の広がり調査し、西端には加曽利B式の包含層があることを確認した。さらに、南北トレンチ(56×2m)をいれて、晩期遺跡の広がり調査し、北端に荒海1式の層があり、それ以南は加曽利B式の包含層が分布していることを確認し、住居跡の一部に遭遇した。

1990年8月3日 共同研究会「発掘現場の検討会」(於・成田市荒海貝塚)

1990年8月4日 発掘参加

1990年8月31日 辻誠一郎 プラント・オパール分析用の試料採取

1990年9月11日 パレオ・ラボ 花粉とプラント・オパール分析用の試料採取(宝田鳥羽貝塚も)

1990年 日本アイソトープ協会 炭素14年代測定 3点

S-1 荒海貝塚I-3区 7b層 木炭

S-2 荒海貝塚I-3区 7b層 ヤマトシジミ

S-1 荒海川河床の自然貝層 サルボウ殻

1991年11月 パレオ・ラボ ボーリング調査(吉川昌伸, 辻誠一郎)

荒海貝塚および宝田鳥羽貝塚周辺で実施した。

発掘調査参加者

石川日出志, 泉 拓良, 岩崎充宏, 大塚達朗, 甲元真之, 小杉 康, 中沢道彦, 林 謙作, マーク・ハドソン, 家根祥多

学生: 林 克彦(青山学院大学), 小口裕絵・佐々木真理・佐藤美奈子・篠沢かおり・立石 彩・増田百合子・宮下直美・茂田井聡美(以上, 川村学園女子大学), 市川浩文・田中聡一・水上綾子(以上, 熊本大学), 後藤雅彦・小林青樹・永井宏幸・山内利秋(以上, 國學院大学), 磯村賢治・勝瀬利栄・合田由美子・榊原博英・原田敏照・宮田健一(以上, 島根大学), 加藤勝仁(千葉大学), 丸井雅子(上智大学), 石井千佳・石橋 充・鳥居晶子・馬場かをり・本多昭宏・山田康弘(以上, 筑波大学), 若林邦彦(同志社大学), 田多井用章・二神葉子(以上, 東京大学), 富岡直人(東北大学), 加藤久夫・五井若葉・工藤 晃・田村陽子・藤城 泰(以上, 奈良大学), 佐野 元・新海正博(以上, 広島大学), 櫛部正典・鈴木康二・中村 豊・福田仁史・牧野 博(以上, 立命館大学), 尾見真起子・久住 猛・小鮒智紀・野澤美紀・眞上 潤・松田光太郎・吉田由紀・渡辺陽子(以上, 早稲田大学)

協力者

新成田総合社, 桐之屋旅館, 成田市教育委員会, 株式会社パレオ・ラボ, 古環境研究所

③ 研究成果

春成秀爾 1990「縄文か弥生か—荒海貝塚から稲作の証拠—」『歴博』39, 10-11頁, 国立歴史民俗博物館

設楽博己 1991「稲作をはじめた関東地方」『歴博』49, 14頁, 国立歴史民俗博物館

設楽博己・春成秀爾 2000「荒海貝塚」『千葉県の歴史』資料編, 考古1(旧石器・縄文時代), 950-959頁, 千葉県

本書 2021

④ 本報告書執筆者（執筆順）

春成秀爾（国立歴史民俗博物館名誉教授）
設楽博己（東京大学大学院人文社会系研究科教授）
西谷 大（国立歴史民俗博物館長）
小林青樹（奈良大学文学部教授）
小林園子（参議院国会議員秘書）
樋泉岳二（早稲田大学非常勤講師）
吉川昌伸（古代の森研究舎）
是枝若菜（特定非営利活動法人 首都圏地盤解析ネットワーク事務局）
藤根 久（株式会社パレオ・ラボ）
杉山真二（株式会社古環境研究センター）
松島義章（神奈川県立生命の星・地球博物館名誉館員）
松谷暁子（東京大学総合研究博物館研究事業協力者）
高瀬克範（北海道大学文学部准教授）
守屋 亮（東京都埋蔵文化財センター）
小林謙一（中央大学文学部教授）
坂本 稔（国立歴史民俗博物館教授）
宮田佳樹（東京大学総合研究博物館）

（春成）